

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00359

研究課題名(和文) 初期近代イングランドにおけるイスラム演劇の改宗のテーマとその政治的・宗教的推進力

研究課題名(英文) Themes and political and religious driving forces of Islamic plays' conversion in early modern England

研究代表者

石橋 敬太郎 (ISHIBASHI, Keitaro)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：80212918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、初期近代イングランドで上演されたイスラム教徒の改宗を主題とした演劇作品を時局的に考察した。結果、George Wilkins他による『英国三兄弟の旅』にはプロテスタントによる改宗が遠い現実であったこと、John Fletcher作『島の王女』には軍事力と改宗をもとに植民地化を進めるポルトガルの実績が認められること、そしてPhilip Massingers作『背教者』には秘跡や洗礼など「目に見える」実践をもとに改宗を進めるイエズス会の実際を明らかにした。あわせて、Thomas Heywood作『西の国の美女』のムーア人の改宗がノスタルジックに描出されていることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

欧米諸国とイスラム諸国との関係は、和解の方向に向かっているものの、今なお中東地域の紛争などにおいて、その亀裂は十分に解決していない。特にイングランドとイスラム諸国との関係については、モロッコやトルコとの商業的な結びつきに始まり、16世紀末にはスペインを標的として軍事的な同盟に発展した。ときの女王エリザベスの親モロッコ・トルコ政策に対して、劇作家たちはイスラム教徒を文化的・宗教的な脅威とみなし、彼らを残虐非道な人物として仕立て上げた。本研究では、イングランドとイスラム諸国との亀裂の解決の糸口として、これら劇作家たちの改宗を基盤とした演劇作品のもつ意義を確認した。

研究成果の概要(英文)：This study examines plays on the subject of Muslim conversion staged in early modern England. The results are that Protestant conversion is shown as a distant reality in George Wilkins, John Day and William Rowle's "The Travels of the Three English Brothers", that the Portuguese colonizing project based on military force and conversion is recognized in John Fletcher's "The Island Princess," and that the Jesuit's conversion practice based on 'visible' practices such as sacraments and baptism in Philip Massinger's "The Renegado" are shown as the reality in early modern period. In addition, this study revealed that the Moorish conversion in his "The Fair Maid of the West, Part II" is depicted nostalgically, in sharp contrast to the Catholic practices of conversion at that time.

研究分野：初期近代イギリス演劇

キーワード：イスラーム 17世紀イギリス演劇 貿易 改宗 植民地化

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景は次のとおりである。これまでの研究においてシェイクスピアなどの英国史劇を取り上げて、ときの女王であるエリザベス(在位 1558 年～1603 年)の政治体制や対スペイン外交政策をもとに、イングランドの神聖な王権を脱神秘化しようとする劇作家たちの試みを動的に解明してきた。これらの作品を分析するなかで、シェイクスピアの『エドワード三世』(1595 年)や『ヘンリー五世』(1599 年)にトルコへの言及があることに着目した。当時のイングランドは、モロッコやトルコとの貿易による経済的な結びつきを強化していたのである。後に両国とイングランドとの経済的な結びつきは、共通の敵スペインの脅威を払拭するために政治的にも利用された。

その間、当時の劇場では、ジョージ・ピールやロバート・グリーンなどによる反イスラム感情に訴えた演劇作品が続々と執筆・上演された。これらの作品では、エリザベス女王政府の親モロッコ・トルコ政策に対する批判を主題としていることを見出した。ジェームズ一世統治期(在位 1603 年～25 年)になると、イングランドの海外市場の拡大につれて、イスラム教徒(あるいは異教徒)の改宗を主題とする演劇作品が次々と執筆・上演されたことに気がついた。このことは、イングランドやポルトガルなどが貿易を利用し、地中海や東インド諸島に至る領域の王侯・貴族をキリスト教に改宗させることによって植民地化に向かいつつあった現状を映し出していると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、初期近代イングランドにおいて書かれた現存する公文書や有力な歴史的基礎資料を活用して、地中海から東インド諸島に至る地域を舞台とし、イスラム教徒(あるいは異教徒)のキリスト教への改宗を描いた演劇作品の時局的な意味を明らかにすることである。そして、プロテスタント主義イングランドにおいて、改宗の主題が推進した政治的、経済的および宗教的な役割や文化現象を時系列的に論じることである。

3. 研究の方法

現在、初期近代イングランドで執筆・上演された演劇研究におけるイスラム世界に向けられた問題意識は、外交、貿易や改宗といった新たな切り口によって、これまでのヨーロッパ地域を中心とした研究から、地中海および東インド諸島に至る地域を再認識しようとする歴史実証主義的な方法論へ推移している。本研究では、初期近代イングランドで書かれた現存する公文書やパンフレットなどの歴史的基礎資料を駆使して、この時代に執筆されたイスラム世界を舞台としてキリスト教への改宗という主題を歴史事象的に検証し直す。そして、プロテスタント主義イングランドにおいて、改宗の主題が推進した政治的、経済的および宗教的な役割や文化現象を時系列的に論じる。これらの研究によって、改宗に対するイングランドの実際を解明する。

4. 研究成果

(1) ジョージ・ウィルキンズ、ジョン・ディーおよびウィリアム・ローリー共作『英国三兄弟の旅』(1607 年執筆・上演)

ジョージ・ウィルキンズ他共作『英国三兄弟の旅』は、1607 年春にアン王妃一座によって上演され、大当たりをとった後、同年の終わりまでレッド・ブル座で上演された。本劇は同年の 6 月に書籍出版業組合に登録され、出版もされた。劇中では、1598 年と 1606 年の間に生じたペルシャとトルコとの武力闘争を背景として、アッバース一世を体現するサファヴィー朝ペルシャ皇帝ソフィの求めに応じた次男アンソニーのロシアやローマなどキリスト教ヨーロッパ諸国訪問の旅が描かれるほか、三男ロバートによるペルシャでのキリスト教会と教育施設の設立が舞台化される。また、キクラデス諸島のキア島においてトルコと戦い、味方の裏切りにより敵の捕虜となった長男トマスが大トルコ皇帝(歴史上のトルコ皇帝メフメト三世)からイスラム教に改宗を迫られる場面を通して、トルコは周辺諸国を恐怖と混乱に陥れる、キリスト教ヨーロッパ諸国の完全な「他者」としても示される。

本劇の見どころは、実在したシャーリー兄弟によるイスラム教ペルシャとキリスト教ヨーロッパ諸国との外交交渉であり、また対トルコ政策としての第三勢力ペルシャの位置づけであったように思われる。従来の批評では、本劇はペルシャを友好国とみなすプロパガンダ劇とみなされてきた。確かにそうなのだが、ペルシャとの同盟を求めるアンソニーのヨーロッパ諸国訪問が大きく国際情勢を展開することはない。ロシア皇帝やローマ教皇などから名誉を与えられるものの、それは個人のレベルにとどまっている。本劇が執筆された時期、イングランドがトルコと同盟関係にあったことも忘れてはならない。トルコ人の捕虜となったトマスは、イングランド国王の介入により釈放される。当時のイングランドの宮廷人や商人にとって、シャーリー兄弟の外交姿勢は奇異に映っていたのである。

ペルシャの改宗については、ソフィがロバートと姪との間に生まれた子どもにキリスト教の洗礼を受けさせ、この国で最初のキリスト教徒にしようという。ソフィがキリスト教会の建設を

も認めたことからするなら、キリスト教(あるいは改宗)を通してイングランドとペルシャとの友好を築こうとする劇作家たちの意図も垣間見える。ただし、ロバートを含むシャーリー家の兄弟がカトリックであり、当時の宗教関係者にとってロバートの宗教活動は容易に認められる問題ではなかった。劇中では、ペルシャ人の改宗については示されておらず、あくまでもソフィがロバートにペルシャにおけるキリスト教信仰を認めたことにとどまっており、ペルシャ人の改宗を認めたわけではない。本研究では、プロテスタント主義イングランドによるイスラム教徒の改宗の主題は、遠い現実であったことを確認した。

(2) ジョン・フレッチャー作『島の王女』(1621年執筆・上演)

ジョン・フレッチャー作『島の王女』は、1621年に国王一座によってブラックフライアーズ劇場で上演され、同年の12月26日にはホワイトホール宮殿で御前公演も行われたほど人気を博した作品である。フレッチャーの作品では、バルトロメ・レオナルド・デ・アルゲンソラの『モルッカ諸島の征服』(1609)などの資料に見られるモルッカ諸島(マルクおよび東インド諸島と称される香料諸島)の宮廷人サラマがポルトガル人アーミュージアに置き換えられ、資料には存在しないムーア人のテルナテ総督がティドーレ島を支配するアクションに書き換えられている。しかも、本劇の資料のティドーレ王女キザーラはキリスト教に改宗することなく、サラマと結婚する。代わりに、劇中ではモルッカ諸島のティドーレ島とテルナテ島を舞台とし、キザーラとアーミュージアとの結婚をめぐるアクションが展開する。

本劇が執筆・上演されたとき、モルッカ諸島は初期近代における香辛料貿易の中心地として、ポルトガル人をはじめとして、オランダ人やイングランド人を引き付けていた。そして、この領域において、これらヨーロッパ人は、莫大な富を生み出すクローヴなど香辛料の独占的交易権をめぐる激しく争っていた。なかでも、ジェームズ朝のイングランド人にとって、ティドーレ島とテルナテ島は、ヨーロッパの貿易路の終点であり、その支配と富を求めてせめぎ合う接触面であった。劇中には、これらの島のひとつティドーレ島で生じているポルトガル人の植民地支配が描出されている。その際に、多神教のティドーレ島の王女キザーラはカトリックに改宗して、アーミュージアと結婚する。すでに指摘されているように、本劇は、異教徒の女性が改宗して、キリスト教徒(カトリック教徒)の男性と結婚するのを舞台化した最初の劇であった。

本研究では、イングランドの視線がモルッカ諸島に向けられていたことを背景とするとともに、同国の東インド会社やレヴァント会社が商業上および外交上の理由から異教徒の改宗に消極的であったことに着目して、劇作家がティドーレ島とテルナテ島を舞台として軍勢力と改宗を利用したポルトガル人による植民地支配の実際を示していることを明らかにした。すなわち、イングランドの貿易会社は、ポルトガルとは異なり、異教徒との友好を通じた貿易方針を掲げ、彼らの改宗には消極的であった。むしろ、これらの会社は、インドやモルッカ諸島領域でのイスラム教徒との接触による改宗を恐れ、彼らを厳しく管理していた。他方、ポルトガルは、早くからイエズス会の布教活動によってこれらの領域の異教徒をカトリックに改宗させ、植民地化を進めていたのである。その結果、ポルトガルのイエズス会は、東インド会社やレヴァント会社にとって大きな脅威となっていた。この研究において、劇中で描出される武力と改宗によるポルトガル人の植民地化をたどることによって、モルッカ諸島領域においてグローバルに展開する彼らの貿易独占の一端を明らかにした。

(3) フィリップ・マッシンジャー作『背教者』(執筆・上演 1624年)

フィリップ・マッシンジャー作『背教者』は、1624年4月にヘンリエッター座によってコクピット座で初演され、1630年までしばしば上演された。本劇の舞台は、16世紀もしくは17世紀の北アフリカのオスマン摂政管区テュニスである。主な資料は、ミゲル・デ・セルバンテスの喜劇『アルジェの監獄』および『ドン・キホーテ』に収録されている「捕虜の話」とされている。このなかでも、『アルジェの監獄』にあるトルコ人の捕らわれの身となったキリスト教女性を救出しようとする婚約者の物語から、劇作家は本劇の着想を得たとされている。1621年に上演されたフレッチャー作『島の王女』の人気に乗じて、トルコ王女ドヌーサのキリスト教への改宗が描かれたとする批評も存在する。劇中では、イエズス会の聴罪司祭フランシスコがトルコ人と化した背教者グリマルディを改心させたほか、平信徒でベネツィアの紳士ヴィテリがトルコ王女ドヌーサをキリスト教徒に改宗させ、彼女と結婚する。

本劇が執筆・上演された前年の1623年、バッキンガム侯爵ジョージ・ヴィリヤーズとチャールズ皇太子によるマドリッド遠征において、カトリックへの改宗を条件としたチャールズとスペイン王女との結婚を画策するイエズス会の陰謀が暴露され、ロンドンでは反カトリック感情が吹き荒れていた。翌年の8月には、イエズス会と共謀して、世界支配の野望を抱く悪辣なスペインを描いたトマス・ミドルトンの『チェスゲーム』が国王一座によってグローブ座で上演された。このような反カトリック感情が吹き荒れるなか、イエズス会による背教者の改心、トルコ王女の改宗と結婚を主題としたマッシンジャーの『背教者』が上演されたことになる。このイエズス会士および平信徒による改宗を舞台化した理由を探ることが従来の批評家の大きな関心のひ

とつであった。

本研究では、当時のイングランドのプロテスタント主義者による改宗の実際とカトリック主義者によるそれとを比較しつつ、ムスリムの改宗の主題を考察した。考察の結果、「目に見えない」教会の教義を実践するプロテスタントとは大きく異なり、イスラム諸国の信仰や慣習を取り入れつつ、秘跡や洗礼など「目に見える」儀式によるカトリックの改宗の実践が劇中に見出せることを明らかにした。たとえば、聴罪司祭フランシスコが挙げる助産婦や戦場の兵士による洗礼をもとに、ヴィテリはドヌーサの顔に水を浴びせて聖別する。こうした目に見える儀式を否定するイングランドのプロテスタントを前にして、イスラム教に見られる儀式を重視する信仰をもとに、着々と異教徒を改宗させるカトリックの実際を、劇作家は描いてみせたのである。

(4) トマス・ヘイウッド作『西の国の美女』第二部（執筆・上演 1630 年頃）

トマス・ヘイウッド作『西の国の美女』第二部がいつ執筆・上演されたのかについてははっきりとしたことはわからない。これまでの研究によると、1631 年の初版本に付された配役表の役者名などから、あるいは第一部と第二部の両方が同年に出版されているとして、1630 年頃と推測されている。その頃の劇場では、クリストファー・マーローの『タンバレイン大王』第一部・第二部（執筆・上演 1587 年）に端を発したモロッコやトルコを題材とした新作の上演が終焉を迎えていた。ヘイウッドの『西の国の美女』第二部の最大の魅力は、ムーア人のパシャであるジョファアがイングランド人スペンサーの勇気や騎士道精神に心を動かされ、キリスト教に改宗した場面である。本劇が執筆・上演された時期、モロッコやトルコとの商取引に際して、イングランド人商人やジョン・ウォードのような海賊がイスラム教に改宗することはあっても、ムスリムがキリスト教に改宗することはほぼありえなかった。

むしろ、イスラム教の支配者や貿易商人たちは、ユダヤ人やキリスト教徒を改宗させ、アルジェのほか、バーバリー地域（テュニスやトリポリを含む北アフリカのオスマン・トルコの摂政管区、および同国の勢力から独立・自治を維持していたモロッコ王国）で展開する中央市場に彼らを取り込み、利益を上げていた。言い換えると、これらの地域での経済的コミュニティの基盤を支えるために、キリスト教徒などの商人や海賊はイスラム教への改宗を求められたのである。なかには、捕虜となり、身代金を支払えないイングランド人も改宗を余儀なくされた。

本研究では、イングランド人がムーア人の圧倒的な宗教的および経済的な力に直面していたこと、またヘイウッドのフェス王ムリシエグがイングランド人の名誉を美德とする精神を認め、キリスト教国に対する理解を示したことを文脈として、ジョファアの改宗のなかにイングランド人の精神的な優位性を示そうとする劇作家の意図が垣間見えることを確認した。ちょうど、本劇が執筆される以前、イングランド国王ジェームズ一世は、ヴァージニアやマサチューセッツなど北アメリカに植民地を求めていた。しかも、イスラム諸国の脅威を回避するためもあって、イングランド人商人の目は、莫大な利益をもたらす東インド諸島に向けられていた。この地域での貿易独占をめぐるオランダとの争いに敗北した後は、イングランドはインド本土に貿易拠点を移した。モロッコは次第に遠い存在になりつつあったのである。そうしてみると、『西の国の美女』第二部に見られるムーア人の改宗はノスタルジーを込めて執筆されたことを合わせて指摘した。

主な参考文献

- Bentley, G.E. *The Jacobean and Caroline Stage*. Vol. 4. Oxford UP, 1968.
- Blow, David. *Shah Abbas: The Ruthless King Who Became an Iranian Legend*. I.B. Tauris, 2009, 2014.
- Brenner, Robert. *Marchants and Revolution: Commercial Change, Political Conflict, and London's Overseas Traders, 1550-1653*. Princeton UP, 1993.
- Brotton, Jerry. *The Sultan and the Queen: The Untold Story of Elizabeth and Islam*. Viking, 2016.
- Chambers, E.K. *The Elizabethan Stage*. Vol. III. Clarendon P, 2009.
- Chew, Samuel C. *The Crescent and the Rose: Islam and England during the Renaissance*. Oxford UP, 1937.
- Coward, Barry and Peter Gaunt. *The Stuart Age England, 1603-1714*. Routledge, 2017.
- Cressy, David. *Birth, Marriage, and Death: Ritual, Religion, and the Life-cycle in Tudor and Stuart England*. Oxford UP, 1997.
- Cromwell, Otelia. *Thomas Heywood: A Study in the Elizabethan Drama of Everyday Life*. Archon Books, 1969.
- Dale, Stephen F. *The Muslim Empires of the Ottomans, Safavids, and Mughals*. Cambridge UP, 2010.
- Dames, Mansel Longworth, ed. *The Book of Duarte Barbosa: An Account of the Countries*

- bordering on the Indian Ocean and their Inhabitants*. Vol. II. Routledge, 2016.
- D'Amico, Jack. *The Moor in English Renaissance Drama*. U of South Florida P, 1991.
- Degenhardt, Jane Hwang. *Islamic Conversion and Christian Resistance on the Early Modern Stage*. Edinburgh UP, 2010, 2015.
- Dille, Glen F., ed. *Spanish and Portuguese Conflict in the Spice Islands: The Loaysa Expedition to the Moluccas 1525-1535*. London: The Hakluyt Society, 2021.
- Dimmock, Matthew. *New Turkes: Dramatizing Islam and the Ottomans in Early Modern England*. Routledge, 2005.
- Edwardes, Michael. *Ralph Fitch Elizabethan in the Indies*. Faber and Faber, 1972.
- Fucks, Barbara. *Mimesis and Empire: The New World, Islam, and European Identities*. Cambridge UP, 2001.
- Grogan, Jane. *The Persian Empire in English Writing, 1549-1622*. Palgrave Macmillan, 2014.
- Harrison, G.B. *Elizabethan and Jacobean Journals 1591-1610*. Vol. V. Routledge, 1958, 1999.
- Laud, William. *The Works of the Most Reverend Father in God, William Laud, Sometime Lord Archbishop of Canterbury*. Hard Press Publishing.
- ②① MacLeen, Gerald and Nabil Matar. *Britain and the Islamic World, 1558-1713*. Oxford UP, 2011.
- ②② Matar, Nabil. *Britain and Barbary, 1589-1689*. UP of Florida, 2006.
- ②③ McJannet, Linda. "Bringing in a Persian." *Medieval and Renaissance Drama in England* 12 (1999): 236-67.
- ②④ McLuskie, Kathleen E. *Dekker and Heywood: Professional Dramatists*. St. Martin's P, 1994.
- ②⑤ Raman, Shankar. "Imaginary islands: staging the East." *Renaissance Drama*, new series, 26 (1995), 131-61.
- ②⑥ Robinson, Benedict S. *Islam and Early Modern English Literature: The Politics of Romance from Spenser to Milton*. Palgrave Macmillan, 2007.
- ②⑦ Smith, Haig Z. *Religion and Governance in England's Emerging Colonial Empire, 1601-1698*. Palgrave Macmillan, 2022.
- ②⑧ Vitkus, Daniel. *Turning Turk: English Theater and the Multicultural Mediterranean, 1570-1630*. Palgrave Macmillan, 2003.
- ②⑨ Wiggins, Martin. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*. Vol. V, VII and VIII. Oxford UP, 2016.
- ③⑩ Wison, Richard. "When Golden Time Convents: *Twelfth Night* and Shakespeare's Eastern Promise." *Shakespeare* 6:2 (2010): 209-26.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石橋敬太郎	4. 巻 47
2. 論文標題 『英国三兄弟の旅』におけるベルシャとキリスト教国との同盟のゆくえーシャーリー兄弟が見たサファヴィー朝ベルシャー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北学院大学英語英文学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 23 42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石橋敬太郎	4. 巻 106
2. 論文標題 『島の王女』におけるキリスト教信仰ーポルトガル人による異教徒の改宗と植民地化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北学院大学論集（英語英文学）	6. 最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石橋敬太郎	4. 巻 107
2. 論文標題 『西の国の美女』二部作におけるノスタルジックなモロッコ表象	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東北学院大学論集（英語英文学）	6. 最初と最後の頁 81-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------